展示記録
リニューアルオープン記念「新シュウ蔵品展―美術館シュウシュウのあれこれ」

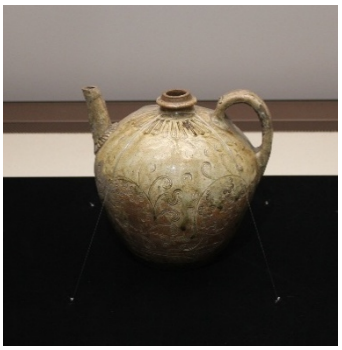
田畑　潤 編
（愛知県陶磁美術館　主任学芸員）

愛知県陶磁美術館は、長寿命化改修工事を経て施設をリニューアルオープンし、展覧会を再開した。リニューアルオープンを記念して、2025 年 4 月 1 日（火）より「新シュウ蔵品展―美術館シュウシュウのあれこれ」を開催した。本展覧会では、長期休館中を含む令和年間に収蔵された作品の中から厳選した作品を展示し、寄贈者の方々への感謝を込めて、当館の収集活動を紹介するものである。

あえて「シュウ」と片仮名表記にしたのは、以下の理由による。あらゆるものを集めるという意味を持つ「収集（シュウシュウ）」に対し、同音の「蒐集（シュウシュウ）」は趣味や研究のために集めることを指し、美術館の目的に近い言葉であることに注目する。また、「シュウ」という言葉には、以下の多様な意味が込められている。集める「集（シュウ）・蒐（シュウ）・聚（シュウ）」、探し求める「捜（シュウ）」、受け取る「受（シュウ）」、ひろい集める「拾（シュウ）」など、集められた経緯を示すことができる。さらに、特に秀でた「秀（シュウ）」、本家に習った「習（シュウ）」、修復が施された「修（シュウ）」、祝いの場で用いられた「祝（シュウ）」、多くのものを集めた「衆（シュウ）」など、作品の本質に関わる「シュウ」を取り上げることにより、美術館がどのようにやきものに関する資料を集め、研究し、そして公開しているのかを紹介するものである。

【秀】：㊥シュウ　①ひいでる。―㋐穀物の穂が伸び出て、花開く。㋑草木が実を結ぶ。㋒草木が花を開く、花。㋓よく茂る。繁茂する。㋔ぬきんでる。高く出る。㋕人にぬきんでている。②ひいでた者。優れた者。③うるわしい。優美である。④元・明代、人の子弟を位分けして、優れた者を秀、末流を郎と称した。⑤姓。

作品になぞらえるならば、【秀】は「①ひいでる。㋔ぬきんでる。高く出る。③うるわしい。優美である。」が相当する。美術館に収蔵される作品のうち、我が国にとって歴史上、芸術上、学術上価値の高いものと認定された「指定文化財」や「受賞作品」を、「秀蔵品」として紹介する。



［出品作品および解説］

NO	名称	産地・作家	時代	登録番号
1	灰釉蕨手唐草文手付水注	瀬戸窯	鎌倉時代（14 世紀前半）	A007201
	「古瀬戸水注、至極の名品」 瀬戸窯は古代最大の窯跡である猿投窯の技術が伝播して開かれました。当時最高峰の輸入された中国のやきものに由来する形が多く、本作も中国の水注をモデルにしています。本作の表面は、ワラビ形、花形のスタンプを押し組み合わせ、花唐草文で飾られています。北大路魯山人の旧蔵品で古くから名品として知られ、令和７年１月に愛知県指定文化財になりました。			
2	三ツの面からなる角皿	栗木達介	昭和 59（1984）年	A007391
	第 16 回日展特選			
3	甲	亀井　勝	昭和 48(1973)年	A007400
	第１回中日国際陶芸展 中日大賞			

【捜】：㊐ソウ　㊥シュウ　㊧ショウ　①さがす。さがしもとめる。②たずねる。③矢の飛ぶ音のさま。④えらぶ。

【捜】は収蔵品において「①さがす。さがしもとめる。④えらぶ。」が相当する。当館の収蔵品は、購入資料と寄附資料に大別される。購入資料は特に、当館のコレクションに欠けているものや、展示の目玉になるもの、陶磁史研究の進展のために必要なものである。やきものの魅力を伝えるべく、これからも捜し求める「捜蔵品」として紹介する。

［出品作品および解説］

NO	名称	産地・作家	時代	登録番号
4	弥生土器 台付壺		弥生時代終末期（2 世紀）	A007535
	「弥生時代終末期の精製土器」 本作は弥生土器でも終末期の作例で、この後 100 年程で古墳時代前期を迎えます。弥生時代終末期から古墳時代前期でも早い時期にかけて、本作のような薄手で器面にミガキを丁寧に施した精製土器が、祭祀用の器として瀬戸内、近畿、北陸、東海等で流行しました。本作はそうした弥生時代終末期の土器様相を如実に示す作例です。			
5	須恵器　灰釉長頸瓶	湖西窯	飛鳥時代（7 世紀後葉）	A007413
	「灰釉の始まりを巡る課題」 静岡県湖西市の湖西窯は、5 世紀後葉に開窯し、13 世紀まで断続的に操業しました。本作は湖西窯の須恵器ですが、肩の部分全周に灰釉層があります。更に灰釉を施す際のものか、頸に３箇所灰釉の付着があります。猿投窯は 8 世紀後半に原始灰釉陶器、9 世紀に灰釉陶器を完成させますが、先行する時期の湖西窯産の本作で自然に降りかかった灰ではなく、意図的に施された『灰釉』と理解できる現象があることは、今後重要な研究課題になります。			
6	須恵器 灰釉双耳壺	猿投窯	奈良時代（8 世紀）	A007381
	「猿投最古級の双耳瓶、紐耳に注目」 本作のように、肩に耳を二つ付けた双耳瓶という形は、日本各地の須恵器窯で奈良時代から平安時代にかけて生産されます。猿投窯でも 8 世紀後半から 9 世紀にかけて双耳瓶が作られていますが、本作は猿投窯の双耳瓶の中でも最古段階に位置づけられるものです。猿投窯の双耳瓶は板耳であることが特徴ですが、本作は先行して双耳瓶を生産していた関西地域と同様の紐耳です。			

<table>
<tr><td rowspan="2">7</td><td>灰釉壺</td><td>渥美窯</td><td>平安時代末期（12 世紀）</td><td>A007412</td></tr>
<tr><td colspan="4">「東北地方でも愛された渥美の壺」
平安時代末期の 12 世紀頃、9 世紀に猿投窯が完成させ、東海地方各地に広がった灰釉陶器の生産が衰退しました。その中で、渥美窯・湖西窯は当期に操業を本格化し、むしろ灰釉技法を採用して平安時代末期に多くの優品を生み出しました。渥美窯の製品は、平泉を拠点とする奥州藤原氏関連の遺跡を中心に東北地方で多く出土しており、本作の類品も福島県、岩手県の経塚で出土しています。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">8</td><td>鉄釉四耳壺</td><td>瀬戸窯／美濃窯</td><td>室町時代･永正 16 年（1519）</td><td>A007382</td></tr>
<tr><td colspan="4">「茶葉を大切に保存します」
中国で香辛料の容器として使われていた四耳壺は、日本では茶葉の容器として賞玩されました。このような唐物茶壺を模し、14 世紀後半に瀬戸、信楽、丹波、備前など陶産地において四耳壺の生産がはじまります。本器の底部には「うはかふところ　永正拾六年　四月日」と線刻があります。現在最も古いとされる東京国立博物館蔵の永正 9 年（1512）の壺、国立歴史民俗博物館蔵の永正 13 年（1516）の壺に次ぎ、3 番目に古い和製の茶壺であり、当館の誇る貴重な資料です。全体には装飾性を抑えた壺ですが、肩の上に 4 か所付けられた耳は、2 本のねん土紐をねじって丁寧につくられています。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">9</td><td>銹絵若松文桔梗形向付</td><td>御菩薩池</td><td>江戸時代中期（18 世紀）</td><td>A007383</td></tr>
<tr><td colspan="4">「さすが京焼」
御菩薩池焼は、17 世紀に始まる京焼の一つです。御菩薩焼とも呼ばれます。深泥池村、現在の京都市北区上賀茂で始まり、寛文 9 年（1669 年）に東加茂に移動し、その 3 年後に烏丸中立売に移動したことがわかっています。当時の茶の湯の流行を背景として、茶碗や水指、また茶事に用いられる向付などが作られました。桔梗の花をかたどったこの向付は、型成形で器を作った後に極限まで削り、花弁の美しい曲線が作り出されています。京焼の優れた技と洗練された作風がうかがえます。なお時代が下り江戸時代後期、19 世紀前半にも京焼のひとつである粟田口焼においても「御菩薩」の印銘が施されたやきものが焼かれたと考えられており、未だ謎が多いやきものです。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">10</td><td>青磁魚文茶詩線彫文器</td><td>尾形周平（初代）</td><td>文政 6（1823）年</td><td>A007403</td></tr>
<tr><td colspan="4">「日本各地の窯を指導した幕末の名工」
尾形周平は、江戸時代後期に活躍した京焼陶工です。江戸時代後期には日本各地に窯が開窯し、肥前や京都、瀬戸など先進窯業地から優れた陶工を招き技術を導入しました。周平は兄・仁阿弥道八と共に和泉国の願泉寺御庭焼を指導したという伝承が残る他、姫路藩窯の東山焼、淡路の珉平焼など、各地の地方窯で指導的な役割を果たしました。江戸時代後期の京焼を語るには欠かすことができない名工・周平の作品を初めて収蔵することができました。器面には唐代の詩人盧仝の「七碗茶歌」が線彫りされています。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">11</td><td>瑠璃釉竹節形水指</td><td>瀬戸窯</td><td>江戸時代後期（19 世紀初期～中期）</td><td>A007537</td></tr>
<tr><td colspan="4">「特別に作られた、濃い瑠璃色」
全体にたっぷりと瑠璃釉をかけた水指です。19 世紀初頭に磁器生産を開始した瀬戸窯では、染付だけでなく瑠璃釉の製品も焼かれました。本作は、茶席ではほぼ黒色に見えるであろうほど深く落ち着いた色を意図しているのが特徴です。希少な天然呉須を多量に用いるこうした濃い発色の瑠璃釉製品は、尾張藩の特別な注文品や返礼品として作られたと考えられます。</td></tr>
</table>

<table>
<tr><td rowspan="2">12</td><td>モダンセット</td><td>三郷陶器</td><td>昭和 30（1955 年）頃</td><td>A007384</td></tr>
<tr><td colspan="4">「昭和のティータイムを彩ったモダンな器」
1932 年に愛知県尾張旭市三郷町に設立された「三郷製陶所」を前身とし、1946 年に陶磁器加工部門「三郷陶器」が設立。ノリタケが欧風のクラシカルデザインを志向した一方で、三郷陶器はモダンデザインを志向しました。1950 年代以降に美術館等の展覧会を通じてアメリカの抽象表現主義の美術が紹介されると、当時の日本美術に大きな影響を与え、次第に工芸品にも抽象的デザインが採り入れられるようになりました。本品はこのような時代背景のもとでデザインされたものでしょう。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">13</td><td>黒皮陶有蓋双鼻壺</td><td>中国・長江下流域</td><td>新石器時代後期・良渚文化
（紀元前 3300 年－紀元前 2250 年）</td><td>A007386</td></tr>
<tr><td colspan="4">「玉のような質感」
中国の新石器時代末期の玉器文化で有名な良渚文化を代表する土器です。縁の左右には「鼻」と呼ばれる縦穴のついた小突起が付き、薄手で灰黒色に磨かれた様子から「黒皮陶」と呼ばれます。日本国内において、良渚文化の完形土器は美術館・博物館には見られない希少な優品です。また、当館の中国古代の玉器コレクションとあわせて展示することができることから捜し求めて購入した作品です。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">14</td><td>黄瀬戸手鉢</td><td>岡部嶺男</td><td>昭和 41（1966）年頃</td><td>A007538</td></tr>
<tr><td colspan="4">「岡部嶺男の黄瀬戸をようやく収蔵」
岡部嶺男（1919-90）は加藤唐九郎の長男として瀬戸に生まれ、若い頃から作陶、築窯、窯焚きの技術を身に着け、瀬戸焼の伝統技法をもとに独自の作風を展開した作家です。この作品はロクロ成形した後にＬ字形のカンナを使って表面を大胆に削り込むことで表面の凹凸が施されています。伝統的な黄瀬戸の技法をとりながら、桃山期の黄瀬戸とは全く異なる岡部嶺男特有のダイナミックな造形が作り上げられています。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">15</td><td>黒釉銀彩直弧文角大皿</td><td>栗木達介</td><td>昭和 55（1980）年</td><td>A007387</td></tr>
<tr><td colspan="4">「土の制約といかに対峙するか」
瀬戸に生まれた栗木達介は、京都市立美術大学で日本陶芸の大家である富本憲吉をはじめ近藤悠三や藤本能道から指導を受けました。栗木が取り組んだのは、収縮や変形などやきもの特有の制約を、制作の必要条件として受け入れつつ、その制約に真っ向から挑むというものでした。そして自らの造形思考を形状・装飾の両面において非常に高度なレベルで体現したのです。</td></tr>
<tr><td>16</td><td>黒釉銀彩直弧文弓型大皿</td><td>栗木達介</td><td>昭和 56（1981）年</td><td>A007388</td></tr>
<tr><td>17</td><td>黒釉銀彩文角扁壺</td><td>栗木達介</td><td>昭和 56（1981）年頃</td><td>A007389</td></tr>
<tr><td>18</td><td>銀緑彩文皿</td><td>栗木達介</td><td>昭和 58（1983）年</td><td>A007390</td></tr>
<tr><td>19</td><td>銀紅彩地文陶 まがり</td><td>栗木達介</td><td>昭和 60（1985）年</td><td>A007392</td></tr>
<tr><td>20</td><td>銀紅彩地文陶 風韻</td><td>栗木達介</td><td>昭和 61（1986）年</td><td>A007393</td></tr>
<tr><td>21</td><td>緑釉花器</td><td>鈴木徹</td><td>平成 31/令和元（2019）年</td><td>A007540</td></tr>
<tr><td>22</td><td>春霞</td><td>水野教雄</td><td>令和 3（2021）年</td><td>A007406</td></tr>
<tr><td rowspan="2">23</td><td>ツチ･ビトー輪ー</td><td>横田典子</td><td>令和 3（2021）年</td><td>A007404</td></tr>
<tr><td colspan="4">「土と人のやり取り」
本作は、自身の行為に反応する土の自在性に対して、自らの意思を添わせたり反発させたりしながら作り上げられています。それは土と人が時に協働し、時に対峙するという対等に近い関係性によって導かれるもので、この点において、土と人とのかかわりを横田独自の視点から描き出しているといえます。</td></tr>
</table>

【受】：㊐ジュ　㊘シュウ　㊖ズ　①うける。―㋐うけとる。さずかる。㋑とる。㋒うけとって収蔵する。㋓うけいれる。㋔うけつぐ。ひきつぐ。㋕うけいれられる。㋖うけいれられる。②さずける。③かいいれる。④もる。⑤なす。⑥呼応する。⑦姓。

【受】は収蔵品として「①うける。㋒うけとって収蔵する。」が相当する。当館の収蔵品は、購入資料と寄附資料に大別される。中でも寄附資料は、当館のコレクションの大半を占め、あらゆる時代・地域の作品が含まれる。作品だけでなく、様々な経緯により集められたその意思を受け継ぎ、後世に残すべき「受蔵品」として時代別・地域別・ジャンルごとに紹介する。

［出品作品および解説］

NO	名称	産地・作家	時代	登録番号
24	把手付椀		古墳時代中期（5 世紀）	A007505
25	提瓶		古墳時代後期（6 世紀）	A007507
26	須恵器 陶馬		奈良時代（8 世紀）	A007202
27	環耳付長頸瓶	猿投窯	平安時代初期（8 世紀末）	A007174
	「猿投窯の代表器種、だけど耳付きはレアな逸品」 猿投窯の歴史の中でも、長期にわたり数多く作られた長頸瓶は、代表的な器種として知られます。その中で、本器のように肩に大ぶりの耳（把手）を持つ形は製作期間も短く、数も少なく、完存する例は極めて稀です。シャープな口作りや均整の取れた造形に、猿投窯の技術力の高さが存分に発揮されています。			
28	灰釉椀	猿投窯	平安時代前期（9 世紀）	A007509
29	灰釉耳皿	猿投窯	平安時代前期（9 世紀）	A007510
30	灰釉深椀	猿投窯	平安時代中期～後期（10～11 世紀前葉）	A007511
31	大甕	常滑窯	平安時代末期（12 世紀）	A007514
32	甕	常滑窯	平安時代末期（12 世紀）	A007456
33	片口小壺	常滑窯	鎌倉時代（13 世紀）	A007211
34	小甕	常滑窯	鎌倉時代（13 世紀後半）	A007459
35	菊花文小甕	常滑窯	鎌倉時代（13 世紀前半）	A007460
36	灰釉瓶子	瀬戸窯	鎌倉時代（13 世紀前半）	A007515
37	壺	信楽窯	室町時代（14 世紀後半）	A007516
38	刻文甕	常滑窯	室町時代（15 世紀）	A007212
39	刻文広口壺	越前窯	室町時代（15 世紀末～16 世紀前葉）	A007465
40	刻文壺	丹波窯	室町時代（16 世紀）	A007517
41	鉄釉平碗	瀬戸窯／美濃窯	室町時代（16 世紀前葉）	A007474
	「デザインいろいろ瀬戸・美濃の碗」 このケースでは室町時代末期（戦国時代）から江戸時代にかけて、瀬戸窯・美濃窯で生産された様々な碗を中心に集めています。用途は一律ではありませんが、一口に瀬戸窯・美濃窯の碗といっても様々なデザインがあり、各時代の流行に敏感に対応し、挑戦していった瀬戸・美濃のモノづくりの様子がうかがい知れます。天目は喫茶専用の碗で、戦国時代には中国にモデルを持つ形だったのが、江戸時代に入ると日本特有の背の高い形が現れ、灰釉流し等の新たな装飾に挑戦しています。拳骨茶碗はあえて滑らかな表面に凹みを加え、変化をつけています。鎧手碗や刷毛目碗からは、飛び鉋や白化粧等新たな技法に挑戦する瀬戸・美濃の陶工の姿勢がうかがえます。			
42	鉄釉灰釉流し天目	美濃窯／大川東窯	江戸時代前期（17 世紀前半）	A007481
43	鉄釉灰釉流し天目	美濃窯	江戸時代前期（17 世紀前半）	A007482
44	天目	瀬戸窯／美濃窯	室町時代（15 世紀末）	A007478
45	天目	瀬戸窯／美濃窯	室町時代（16 世紀前半）	A007479

46	天目	瀬戸窯／美濃窯	江戸時代（17 世紀中葉～後葉）	A007484
47	長石釉天目	瀬戸窯／美濃窯	江戸時代前期（17 世紀前半）	A007480
48	鉄絵草文鉢	瀬戸窯	江戸時代前期（17 世紀前半）	A007486
49	刷毛目碗	瀬戸窯	江戸時代中期～後期（18 世紀後葉～19 世紀）	A007492
50	刷毛目碗	瀬戸窯	江戸時代中期～後期（18 世紀後葉～19 世紀）	A007493
51	刷毛目碗	瀬戸窯	江戸時代中期～後期（18 世紀後葉～19 世紀）	A007494
52	刷毛目碗	瀬戸窯	江戸時代中期～後期（18 世紀後葉～19 世紀）	A007495
53	刷毛目碗	瀬戸窯	江戸時代中期～後期（18 世紀後葉～19 世紀）	A007496
54	柳茶碗	瀬戸窯	江戸時代後期（19 世紀）	A007503
55	柳茶碗	美濃窯	江戸時代後期（19 世紀）	A007504
56	緑釉敷瓦	瀬戸窯	江戸時代前期（17 世紀）	A007488
57	緑釉碗	瀬戸窯	江戸時代後期（19 世紀前半）	A007502
58	鎧手碗	美濃窯	江戸時代中期（18 世紀後葉）	A007497
59	鎧手碗	美濃窯	江戸時代中期（18 世紀後葉）	A007498
60	鉄釉灰釉掛分け碗	美濃窯	江戸時代中期（18 世紀後葉）	A007499
61	鉄釉鎧手湯飲茶碗	瀬戸窯	江戸時代中期～後期（18 世紀後葉～19 世紀前半）	A007500
62	掛分け鎧手碗	瀬戸窯	江戸時代後期（19 世紀前葉）	A007501
63	拳骨茶碗	美濃窯	江戸時代中期（18 世紀中葉）	A007489
64	拳骨茶碗	美濃窯	江戸時代中期（18 世紀中葉）	A007490
65	拳骨茶碗	瀬戸窯／美濃窯	江戸時代中期～後期（18 世紀中葉～19 世紀）	A007491
66	鉄釉灰釉流し四耳壺	美濃窯／大川東窯	江戸時代前期（17 世紀）	A007518
67	染付花鳥文手付手焙	川本治兵衛（三代）	江戸時代後期（19 世紀中期）	A007734
	「随所に見られる高度な技」 江戸時代の瀬戸染付を代表する窯屋、川本治兵衛による手付の手焙です。特に三代治兵衛（不詳～1865）は、中国磁器の写しをはじめ、素地土の改良や瑠璃釉の開発など意欲的な制作を行いました。本作は、器形の巧みさとそれを可能にする成形と焼成技術に加えて、多くのモチーフを詰め込みつつもバランスよく整えた絵付など、治兵衛の佳作の一つとされるべきものと言えます。			
68	染付四君子文食器揃	川本半助（四～六代）	江戸時代後期（19 世紀中期）	A007736 ～7743
	「きちんと揃った美しさ」 染付の四君子文の器が整然と並ぶ、食器揃いです。皿、小皿、鉢、膾皿、蓋付碗、大小の猪口が揃っており、揃いの火入もあります。皿などの「針木形」とは、輪花形の口縁の一部が外に鋭く尖った形を言います。器の器壁は、いずれも程よい厚みで食器としての実用に耐える堅牢さがあります。川本半助は輸出用製品も手掛けましたが、こちらは国内向けの実用品であると考えられます。			

<table>
<tr><td rowspan="2">69</td><td>染付捻文鉢、染付捻文皿</td><td>川本桝吉（初代）
川本桝吉（二代）</td><td>江戸時代後期（19 世紀中期）</td><td>A007754,
7755</td></tr>
<tr><td colspan="4">「爽やかでモダンなねじねじ」
瀬戸の染付の技が冴える作です。染付で高台周りを六角形に囲み、六角形の各辺から濃紺～白まで 4 段階の濃淡の差をつけた帯を捻じりながら伸ばし、口縁で文様を途切れさせず、内側面を経て見込み中央まで帯を延ばしていきます。ダミ筆の跡がはっきりと残りますが、染付の発色は極めて良く、大変爽やかな印象を与えています。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">70</td><td>染付葵唐草文四段脚付重箱</td><td>瀬戸窯</td><td>江戸時代後期（19 世紀中頃）</td><td>A007735</td></tr>
<tr><td colspan="4">「瀬戸の技術、極まる」
大型の四段重箱です。全体に堅牢なつくりとなっているため、重量もあり、これをほぼ歪みなく焼き上げる瀬戸の磁器焼成の技術の確かさを感じることができます。絵付けは全て染付で、唐草文で全体を埋め、蓋の縁のみ幾何学文を施しています。染付の筆致は極めて細く、正確に引かれています。蓋に小さな葵の葉が 3 か所入れられています。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">71</td><td>染付竹と漢詩文花瓶</td><td>川本桝吉（初代）
大出東皐</td><td>明治 3（1870）年～明治 13（1880）年</td><td>A007753</td></tr>
<tr><td colspan="4">「瀬戸に滞在した南画家」
大出東皐（1841-1905）は、明治期に活躍した南画家で、明治 3 年（1870）に瀬戸を訪れ、同 13 年（1880）まで滞在しました。その間、川本桝吉、川本半助、加藤周兵衛、川本利吉などの窯屋において絵付けを行いました。
　本作は、墨あるいは蝋などの撥水材で白抜き部分を描き、呉須で外側面全体を塗り込め、通常の染付とは色彩を反転させたものとしているのが特徴です。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">72</td><td>染付鳳凰唐草文楕円皿</td><td>加藤周兵衛（二代）</td><td>明治時代中期～大正時代
（19 世紀中期～20 世紀前期）</td><td>A007760</td></tr>
<tr><td colspan="4">「洋食器づくりの苦労」
加藤周兵衛（二代）は、主に米国・英国向けの食器を生産していました。本作のような鳳凰唐草文を高密度で配した食器は、周兵衛窯の主力製品であり数多く生産されたものと考えられます。しかし、オーバル形の大型プレートは、特に歪みなく焼き上げるには非常に高い技術を要したようで、瀬戸の洋食器づくりの黎明期の苦労が忍ばれます。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">73</td><td>染付花唐草文輪花皿</td><td>加藤周兵衛（二代）</td><td>明治時代中期～大正時代
（19 世紀中期～20 世紀前期）</td><td>A007761</td></tr>
<tr><td colspan="4">「複雑な輪花皿に挑戦」
加藤周兵衛（二代）が手掛けた、複雑な形の変形皿です。周兵衛の洋食器セットやカップ＆ソーサー等は、当館所蔵品をはじめ、残されている数は多いのですが、本作のような変形皿は珍しいものです。周兵衛は、森村組（現・ノリタケ株式会社）の指定工場として、輸出用ディナーセットを手掛けていたため、なんらかの特別な注文があったのかもしれません。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">74</td><td>染付瑞鳥文蓋付双耳壺</td><td>加藤周兵衛（二代）</td><td>明治時代中期～大正時代
（19 世紀中期～20 世紀前期）</td><td>A007762</td></tr>
<tr><td colspan="4">「珍しい、東洋風の壺」
こちらも、周兵衛の作ですが、本作のような双耳壺は珍しいものです。おそらく西欧向けの輸出用に、東洋風のインテリアを求められて制作されたと考えられますが、明確な用途は不明です。絵付の繊細さや磁器の白さなどは非常に洗練されており、周兵衛の技術力がいかんなく発揮されたものです。</td></tr>
</table>

<table>
<tr><td rowspan="2">75</td><td>染付葵文把手付蓋物</td><td>加藤周兵衛（二代）</td><td>明治時代中期～大正時代
（19 世紀中期～20 世紀前期）</td><td>A007759</td></tr>
<tr><td colspan="4">「同じ形は多いけれど…」
両把手が付いた四脚の蓋物で、ディナーセットの中のスープチュリーンと考えられます。洋食器を多く輸出した加藤周兵衛（二代）の作です。実は、当館所蔵品には同じ形の蓋物が 3 点あるのですが、本作は、文様間の余白を取り葵の家紋（尾州葵）を最も目立つように配置した他には無い文様を持つもので、特別に注文された食器として作られたことが推測されます。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">76</td><td>瑠璃釉貼付色絵猩々文水壺</td><td>加藤紋右衛門（六代）</td><td>明治時代中期（19 世紀中期～20 世紀初頭）</td><td>A007757</td></tr>
<tr><td colspan="4">「ひょうきんな猩々が踊る」
胴部中央の三方に姿の異なる猩々のレリーフを貼付けた、ユニークな水壺です。瀬戸窯の瑠璃釉製品の多くは、染付か青磁釉のみを伴いますが、本作は色絵金彩が施された希少な例といえます。多くの輸出製品を手掛けた加藤紋右衛門（六代）の作ですが、器形、装飾とも類例に乏しく研究の余地を残しています。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">77</td><td>釉下彩蟹図小花瓶</td><td>ゴットフリード・ワグネル</td><td>明治 16 年（1883）頃</td><td>A007216</td></tr>
<tr><td colspan="4">「大学の研究室で」
頸が短く胴から腰に膨らむ小花瓶に、緑・赤・黒・褐色を用いて 3 匹の蟹や植物を彩画しています。一見、従来の陶器と変わりませんが、本作は釉薬の下に多色の絵具で描く、欧米の陶器を参考にした「釉下彩陶器」の試作品です。御雇外国人であった G・ワグネルが明治 16 年頃、東京大学の研究室で開発しました。その後、この陶器は吾妻焼・旭焼と命名され、広く全国に影響を与えました。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">78</td><td>釉下彩葦鴨図蓋付碗</td><td>ゴットフリード・ワグネル
荒木探令</td><td>明治 17（1884）年～明治 20（1887）年</td><td>A007217</td></tr>
<tr><td colspan="4">「試行錯誤は続く」
腰から口縁に向かって広げ、胴部をやや絞った形状の本体に、蓋が付いています。素地は〈釉下彩蟹図小花瓶〉と比べると、はっきりと白色度を増し、また薄手に成形されています。釉下彩の茶褐色で葦と鴨を描き、水辺と空を青色で表現しています。注目すべきは背景の水色で、他のワグネルの研究作品に多く認められる、布を用いたぼかしではなく、筆塗りを行ったと考えられる作例です。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">79</td><td>釉下彩富士図鉢</td><td>ゴットフリード・ワグネル
荒木探令</td><td>明治 17（1884）年～明治 20（1887）年</td><td>A007218</td></tr>
<tr><td colspan="4">「狩野派の画家が絵付」
ロクロ成形で、腰部から緩やかな曲線で立ち上がり胴部から口縁まではまっすぐに外に開いています。素地は薄手で不透明な白さが特徴的です。釉下に黒、赤茶、青、褐色を用いて遠景に白く雪をまとう富士山、前景に秋の農村の風景を描いています。本体胴部に「探令寫筆〇狩」と銘があり、吾妻焼・旭焼の絵付を担当した狩野派の画家・荒木探令が描いたことがわかります。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">80</td><td>釉下彩葦鷺図蓋付碗</td><td>ゴットフリード・ワグネル
荒木探令</td><td>明治 17（1884）年～明治 20（1887）年</td><td>A007219</td></tr>
<tr><td colspan="4">「日本美術の美しさを陶器に」
鷺は素地の白さを生かし、輪郭線のみで、周囲を鳶色にぼかし彩色することで浮かび上がらせ、葦は絵筆の自然な筆致のまま描かれています。ワグネルは最新欧米技術を用いながら、濃淡表現や絵筆の筆致といった日本美術の美しさを備えた陶器を自ら研究しました。箱の蓋裏紙ラベルに、永年ワグネルの助手を勤めた植田豊橘の名前があります。</td></tr>
</table>

<table>
<tr><td rowspan="2">81</td><td>浮彫海の幸文花瓶</td><td>帯山与兵衛（八代、九代）</td><td>明治 10 年代前後</td><td>A007781</td></tr>
<tr><td colspan="4">「フグ、タコ、エイ…」
ロクロ水挽きされた器体は、円筒を胴部でふくらませ、紡錘体の形状をしています。本作品は、胴部の盛り上げ装飾に特徴があり、大きくうねり砕け散る波は、陰影をともなって立体感を生み出し、さらに、文様のある胴部を単色にすることで、文様と、それを生み出す造形力を一層強調する効果を上げています。色彩豊かで、華やかな印象が強い近代の京焼作品の中ではやや異色な作例です。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">82</td><td>瑠璃地金彩鶉図瓶</td><td>瓢池園／泉梅一</td><td>明治 11 年（1878）</td><td>A007519</td></tr>
<tr><td colspan="4">「万国博覧会出品作品か」
鮮やかな瑠璃釉に金彩のみで絵付けされており、瓢池園の洗練された作風がうかがえる作品です。底裏に「第六百二十八号 明治十一年一月 日本東京 瓢池園 梅一製」とあり、名工として知られた画工の泉梅一が、絵付けしたものであることがわかっています。瓢池園は輸出用陶磁器の絵付け工場で、繊細な作風が評価され、多くの博覧会で好評を博しました。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">83</td><td>金彩龍鳳文耳付瓶</td><td>横井惣助</td><td>明治時代（19 世紀）</td><td>A007520</td></tr>
<tr><td colspan="4">「ゴールデンドラゴン＆フェニックス」
頸部には黒地の表裏の窓絵に鳥と獅子、胴部中央には白地の表裏に龍と鳳凰と波文が金彩で描かれています。底裏には金彩銘で「大日本愛知縣横井惣助製造」と記されています。横井惣助は、江戸時代末期の名古屋の陶工で、漆画に金彩の絵付けを得意としたといわれています。第 1 回、2 回内国勧業博覧会に出品し、第 1 回では鳳紋賞牌を受賞しました。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">84</td><td>青華磁鯉魚之図花瓶</td><td>清風与平（三代）</td><td>明治 26（1893）年～大正 3（1914）年</td><td>A007842</td></tr>
<tr><td colspan="4">「魚、水、光」
主題は、揺れる水藻の間を泳ぐ鯉の一群で、魚体と水や光の表現を巧みに行っています。器体の最も上部に配された鯉は、魚体を盛り上げ技法で陽刻にし、深緑系釉薬一色にすることで強調し、その右下を泳ぐ最も大きな鯉は全体を呉須で塗った後、魚体上部を深緑系釉薬で彩ることで、水面近くを泳ぐ鯉の魚鱗のざらりとした質感と水面の光の反射を見事に表現しています。他の鯉にも注目してみてください。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">85</td><td>青磁盃</td><td>京都市陶磁器試験場</td><td>大正 4（1915）年</td><td>A007221</td></tr>
<tr><td colspan="4">「成果を分かち合う記念品か」
大正 4 年、大正天皇の即位に際し、京都市より完成したばかりの〈青磁耳付花瓶〉と〈青磁袴腰香炉〉が献上されました。本作品は、〈青磁耳付花瓶〉と同様の色合いを持っており、また高台内に「大典記念」「〇に陶」象嵌銘があること、さらに「献上青磁/盃（墨書）」「京都市陶磁器試験場之印章（朱文朱印）」がある箱を伴うことから、関係者に配られた品と推測されます。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">86</td><td>染付蝶文碗</td><td>京都市陶磁器試験場</td><td>大正 4（1915）年頃</td><td>A007224</td></tr>
<tr><td colspan="4">「図案改良を制作面でサポート」
高台から緩やかな曲線にて口縁まで外に開く形状の小碗です。濃い発色の酸化コバルトを用い、エアログラフ（噴霧器）によると考えられる吹き絵技法でアール・ヌーヴォー調の蝶文様を施しています。試験場は、洋画家・浅井忠を中心に図案家や製陶家が集い、明治 36 年から活動した図案研究団体「遊陶園」の実制作をも担っていました。そうした活動を想起させる試作品です。</td></tr>
</table>

<table>
<tr><td rowspan="2">87</td><td>マロン金盛帯人物文テーブルウェア</td><td>遠藤陶器株式会社</td><td>昭和 30～40 年代（1955～1974）</td><td>A007441～7444</td></tr>
<tr><td colspan="4">「中近東向けの豪華テーブルウェア」
名古屋の加工完成業・遠藤陶器が製造した中近東向けの商品です。特徴的な深い赤紫の色は「マロン」と呼ばれ、絵具の材料に金を使うことから大変高価なものでした。このテーブルセットには高価な「マロン」がたっぷり吹きつけられており、そこに中近東の買い手が好む器形や、金の装飾が施された豪華な品です。イラン向けの輸出は 1980 年のイラン・イラク戦争が勃発するまで続きました。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">88</td><td>色絵金彩富士風景桜文ティーセット</td><td>杉森陶器</td><td>1960～80 年代</td><td>A007797</td></tr>
<tr><td colspan="4">「愛知産の九谷焼？」
アメリカ輸出用のティーセット。手描き、ゴム印、吹き刷毛、抜き絵など名古屋絵付けの技法が使われています。底裏にはエンブレム内に「九谷」、「Kutani China」と記されています。マークは海外バイヤーの指示により施されたもので、海外で人気であった九谷焼風を意図したものでしょう。一見すると九谷焼と認識される陶磁器が、実は瀬戸・美濃で素地が生産され、名古屋で絵付け加工されていました。昭和後期の名古屋絵付けの様相が垣間見える好資料です。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">89</td><td>瑠璃金彩コーヒーカップ＆ソーサー</td><td>三郷陶器</td><td>1970 年代</td><td>A007227</td></tr>
<tr><td colspan="4">「「デザインのサンゴ―」美しいカップ＆ソーサー―」
三郷陶器株式会社は、1932 年に洋食器の白生地生産を目的として愛知県尾張旭市に設立した三郷製陶所と 1946 年設立の絵付け加工会社三郷陶器が 1952 年に合併し設立された製陶会社です。モダンデザインを積極的に取り入れ、「デザインのサンゴ―」と呼ばれました。白磁カップ＆ソーサ―2 点は直線とカーブが巧みにデザインされ、当時としては斬新な形状でした。また瑠璃金彩カップ＆ソーサ―は、同社が 1973 年に開発した新素材の磁器で透光性と耐久性に優れた「マグナ」の素地が使われています。</td></tr>
<tr><td>90</td><td>白磁コーヒーカップ＆ソーサー</td><td>三郷陶器</td><td>1970 年代（昭和 45～54 年）</td><td>A007225</td></tr>
<tr><td rowspan="2">91</td><td>色絵金彩バラ模様コーヒーセット</td><td>遠藤陶器株式会社</td><td>昭和 50 年代（1975～1984）</td><td>A007449</td></tr>
<tr><td colspan="4">「平筆一本で描かれたバラの花」
遠藤陶器株式会社がアメリカ向けに生産していた商品で、油で溶いた洋絵具を使って、ほぼ平筆一本で色の濃淡まで描く洋風絵付けの「油溶き技法」によって描かれています。バラ模様は明治時代後半から昭和 60 年代まで輸出用陶磁器の人気のモチーフの一つでした。素早く、かつ豪華に仕上がる名古屋絵付けの職人技によって多くの絵付けが可能になり、欧米各国へ輸出されていきました。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">92</td><td>色絵金彩草花散らしティーセット</td><td>遠藤陶器株式会社</td><td>昭和 50 年代（1975～1984）</td><td>A007450</td></tr>
<tr><td colspan="4">「ヨーロッパ風の草花散らし」
遠藤陶器株式会社は、陶磁器に装飾を施す名古屋の加工完成業者です。このティーポットの形状は遠藤陶器オリジナルのもので、「遠藤式」と呼ばれていました。植物のつるのような優美なハンドルや、花びらのような大きなヒダが付く口縁部が特徴で、素地は瀬戸で作られています。小花模様は名古屋で作られた海外輸出向けの洋食器の原点となるデザインの一つで、人気の高いものでした。</td></tr>
</table>

<table>
<tr><td rowspan="2">93</td><td>色絵シェルケース</td><td>遠藤陶器株式会社</td><td>1989 年</td><td>A007452
-000001～5</td></tr>
<tr><td colspan="4">「やきもの貝？」
アメリカの陶磁器メーカーLENOX の製品として、遠藤陶器株式会社が製造した貝殻形のケースです。ある日バイヤーが実物の貝を持ってやって来て「これと同じ貝の小物入れを作ってくれ」と依頼され、製作に大変苦労したそうです。形やツヤなどの質感、色や模様まで驚くほどそっくりに再現されています。全て手描きで彩色され、絵具はこの商品のためにオリジナルで調合されました。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">94</td><td>TIFFANY カップアンドソーサー
《MRS. DELANY'S FLOWERS》</td><td>小林陶器株式会社</td><td>1980 年代</td><td>A007799</td></tr>
<tr><td colspan="4">「世界もみとめる技術力」
小林陶器は、磁器産地の瀬戸・美濃から便の良い名古屋市で発祥した加工完成業者です。特に転写の技術は国外からも高い評価を受けており、TIFFANY や Dior など世界的に有名なブランドの商品を請け負っていました。加工完成を担う業者の名前が表に出ることはほとんどありませんが、愛知県のやきもの産業が縁の下の力持ちとして世界の商品を支えていたことを示す資料です。</td></tr>
<tr><td>95</td><td>TIFFANY ディナープレート
《MRS. DELANY'S FLOWERS》</td><td>小林陶器株式会社</td><td>1980 年代</td><td>A007800</td></tr>
<tr><td>96</td><td>Dior テーブルウェア
《BROCHE Dior》</td><td>小林陶器株式会社</td><td>1989 年ごろ</td><td>A007805-
7808</td></tr>
<tr><td rowspan="2">97</td><td>光和陶器ノベルティデザイン画（鳥・動物）</td><td>光和陶器株式会社</td><td>1960～1990 年代</td><td>E-0069</td></tr>
<tr><td colspan="4">「ノベルティ製作の基本となる資料」
現在は、瀬戸でノベルティを生産していた製陶所の多くが製造を停止したため、デザイン画は廃棄されてほとんど残っていません。令和 3、4 年度にデザイン画約 1400 点をまとまったかたちで寄贈を受けることができました。デザイン画は、ノベルティ製作会社におけるデザイナーの仕事やデザイン画の役割、デザイン考案からノベルティ製品化決定までの流れを知ることができる貴重な資料です。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">98</td><td>ノベルティ　日本人形</td><td>テーケー名古屋人形製陶株式会社</td><td>1960 年代</td><td>A007453</td></tr>
<tr><td colspan="4">「キラキラ輝く着物がステキ」
随所に愛知の優れた製陶技法が使われています。ボディは泥状にした成土を石膏型に流し込んで成形する「鋳込み成形」、毛髪部分は粘土をひも状に絞り出す瀬戸で俗称「スパゲッティ」と呼ばれる技法、また着物の柄は名古屋絵付けの装飾技法のひとつである「ガラス盛り」が使われています。瀬戸を代表するノベルティメーカーの初期作をご寄附いただきました。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">99</td><td>猫の親子チェーン付き</td><td>谷川製陶所</td><td>1960～1970 年代</td><td>A007798</td></tr>
<tr><td colspan="4">「チェーンでつながってるから 1 点だよね」
1960 年代から 1970 年代に北米輸出向けに作られた製品。当時の輸出商社やメーカーにとって重要な経営的関心事は、いかに輸出にかかる経費を抑えるかということでした。親猫 1 匹と子猫 8 匹をチェーンでつなぎ合せて 1 点に仕立てられたこのノベルティは、関税が 1 点毎にかかることを逆手にとったもので、いわばしたたかな節税対策といえるかもしれません。可愛いだけじゃない、愛知の産業陶磁史のリアルを語る興味深い資料をご寄付いただきました。</td></tr>
</table>

<table>
<tr><td rowspan="2">100</td><td>ノベルティ ヨーロッパゴシキヒワ</td><td>光和陶器株式会社
大東三進株式会社</td><td>1979 年</td><td>A007454</td></tr>
<tr><td colspan="4">「繊細な白い花びらにご注目」
イギリスのフランクリン・ポーセリン社の限定品として瀬戸のメーカーでつくられたノベルティ。底部の文字より、RSPB(王立鳥類保護協会）の監修で製作された限定品であったことがわかります。フランクリン・ポーセリン社は創業当時から高級磁器製品を取り扱うことで知られており、自社工場で製造する一方で、世界各地の製陶所にオリジナル製品を依頼していました。瀬戸のメーカー大東三進と光和陶器の製作技術は世界的に信頼を得ていたことがうかがえます。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">101</td><td>ノベルティ バラのオルゴール
《Melodious Rose》</td><td>加藤工芸株式会社
光和陶器株式会社</td><td>1980 年代</td><td>A007455</td></tr>
<tr><td colspan="4">「オルゴール曲目はバラ色の人生」
国内向けの高級ノベルティとして作られたオルゴール付きのノベルティです。台の中にはオルゴールが取り付けられています。ノベルティを中心に小物などを取り扱った陶磁器商社の加藤工芸が企画し、花のノベルティを得意とした光和陶器株式会社に依頼して制作されたものです。花びらのやわらかさとみずみずしささえ伝わる表現は見事です。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">102</td><td>ノベルティ･マリアランプ</td><td>丸邦酒井製陶株式会社</td><td>1990 年代前半</td><td>A007228</td></tr>
<tr><td colspan="4">「灯りをつけるとマリア様が登場」
瀬戸ノベルティには主に　①人物や動物、花、②インテリア用品、③キリスト教の宗教人形のジャンルがあります。マリアランプは宗教人形のひとつです。マリアのモチーフは、マリア像のモノクロ写真を元に描かれたもので、透光性が高い磁土を圧力鋳込みによって成形した後に、素地を彫ることで作り出された素地の厚薄によって、絵画のような雰囲気が醸し出されます。制作に携わっていた方からの寄贈により、当館のノベルティコレクションの幅が広がりました。</td></tr>
<tr><td>103</td><td>「東大寺大佛殿瓦」軒平瓦</td><td>渥美窯</td><td>鎌倉時代前期（13 世紀）</td><td>A007457</td></tr>
<tr><td rowspan="6"></td><td colspan="4">「瓦ー屋根を守る建材が語る」（103～109）
瓦は屋根を守る建材としてのやきものです。六世紀末に寺院建築とともに瓦作りが伝来し、徐々に寺院や役所、城郭、民家へと瓦葺きが広まり現在に至ります。ここでは近年寄贈の瓦とその製作道具を紹介します。「東大寺大佛殿瓦」の大きな文様が目を引く作は、源平合戦の折に伽藍の大半が焼失した東大寺の再建のために、愛知県田原市伊良湖の窯で作られたものです。　瓦には基本釉薬を施しませんが、積雪や低温等が課題となる北陸地方では、江戸時代以降施釉瓦が取り入れられています。一方、瀬戸では装飾性を意識した施釉瓦の生産があり、異なる意図での施釉瓦が注目されます。瀬戸での施釉瓦生産は途絶えていますが、その製作道具は瀬戸のやきもの作りの中での瓦製作の存在を今に伝えています。</td></tr>
<tr><td>104</td><td>黒釉鬼瓦</td><td></td><td>昭和 20 年代（1945～54）頃</td><td>A007179</td></tr>
<tr><td>105</td><td>鉄錆釉水紋鬼瓦</td><td></td><td>明治時代末期～大正時代(20 世紀前半)</td><td>A007178</td></tr>
<tr><td>106</td><td>アラジガタ
（上丸瓦（スパニッシュ型）用）</td><td></td><td>昭和時代(20 世紀)</td><td>A007180-
000001</td></tr>
<tr><td>107</td><td>石膏笵型（鬼面文鬼瓦用）</td><td></td><td>昭和時代(20 世紀)</td><td>A007180-
000027</td></tr>
<tr><td>108</td><td>緑釉桟瓦</td><td></td><td>昭和時代(20 世紀)</td><td>A007181-
000001</td></tr>
</table>

109	緑釉宝相華文変形軒丸瓦		昭和 8(1933)年頃	A007182-000001
110	青白磁日月壺	中国	南宋～元時代（12～13 世紀）	A007521
	「死者の魂のよりしろとなる器」 日月壺とは、本来は龍文と太陽文をもつもの、および虎文と月文をもつものとで対をなすものですが、単体でも日月壺と呼び、墓への副葬品として制作されました。貼り付けの貼花技法で種々の装飾が施されており、龍文と太陽文のほか、立ち姿の人物像や禽獣、鳥、蛇、亀、雲文などがみられます。人物像は 13 人配され、うち 1 人はしゃがみこんでいるのが特徴です。			
111	青磁蓮弁文碗	中国・龍泉窯	南宋時代（13 世紀）	A007523
	「珠玉の青磁コレクション」 中国・韓国陶磁の新収蔵品から、各種の青磁を紹介します。13 世紀、南宋時代後期に龍泉窯で造られた明るい青色（粉青色）は、日本では「砧青磁」と呼ばれ珍重されてきました。13 から 14 世紀の元時代以降の緑色がかった龍泉窯青磁も日本では「天龍寺青磁」と呼ばれたものです。また、耀州窯青磁も、独特のオリーブグリーン色が人気を博しています。高麗青磁の中でも質の高いものを、高麗人は「翡色」と呼び、翡翠にも似た透明感のある青緑色の釉が最も高く評価されています。数多のコレクションから厳選して受け入れた、青磁の釉調の違いが楽しめる作品群です。			
112	青磁刻花蓮花文盤	中国・龍泉窯	元～明時代初期（13～14 世紀）	A007524
113	青磁刻花魚亀文鉢	中国・耀州窯	金～元時代（12～13 世紀）	A007522
114	青磁印花黄蜀葵文輪花鉢	韓国	高麗時代（12 世紀）	A007527
115	有蓋高杯	韓国	三国時代（5 世紀）	A007529
116	波状文広口壺	韓国	三国時代（5 世紀）	A007189
117	波状文双耳壺	韓国	三国時代（5～6 世紀）	A007531
118	陶磁水滴コレクション		日本：鎌倉時代－平成年間、 中国：中心は清代－現代	A007193
	「文房具を飾るは文人の嗜み」 文人の嗜みと言えば「琴棋書画」、書につきものなのは文房具と言えます。硯は武人の刀、女性の鏡に例えられ、文人の魂である文房四宝（筆、墨、硯（No.119,120）、紙）の王者とされています。二点の硯屏のうち、白磁の人物像は、筆と銀錠を持ち、左足で枡を蹴り上げていることから、科挙の受験生に信奉された「魁星」（文星・文昌帝君）と考えられます（No.124）。また、筆洗に装飾された龍は、水に棲む「蛟龍」であることから、文房具にちなんだ意匠が施されているところも文人趣味と言えるでしょう（No.125）。バラエティに富んだ水滴は、永年蒐集された千点以上の一括寄贈のコレクションです（No.118）。			
119	長方硯		平安時代末期（12 世紀）	A007209
120	花形装飾付長方硯	猿投窯	平安時代末期～鎌倉時代 （12 世紀中葉～13 世紀後葉）	A007584
121	染付鉄絵貼付蝶文硯屏	瀬戸窯か	江戸時代後期（18～19 世紀）	A007562
122	五彩龍文八角硯	中国・景徳鎮窯	明時代後期（萬暦年間・1573～1620）	A007560
123	青花十字形印章	中国・景徳鎮窯	明時代後期～清時代初期（17 世紀）	A007564
124	白磁魁星硯屏	中国・徳化窯	明時代末期～清時代（17～18 世紀）	A007561
125	炉均釉筆洗	中国・景徳鎮窯	清時代（17～18 世紀）	A007563

126	指し図鉢	河井寛次郎	昭和 11 年（1936）頃	A007378
127	早蕨釉力花瓶	楠部彌弌	昭和 38（1963）年	A007420
128	塔花瓶	楠部彌弌	昭和 40（1965）年	A007421
129	青磁獅子鈕香炉（作品名不詳）	楠部彌弌	1940-50 年代	A007416
130	金彩松文花瓶（作品名不詳）	楠部彌弌	1960 年代	A007418
131	作品名不詳	林康夫	昭和 34（1959）年頃	A007787
132	輪	林康夫	昭和 45（1970）年	A007789
133	Wall A	林康夫	昭和 53（1978）年	A007790
134	Rising White Object	林康夫	昭和 55（1980）年	A007792
135	作品 80-2	林康夫	昭和 55（1980）年	A007791
136	Refraction B	林康夫	昭和 60（1985）年	A007793
137	寓舎「ブルーの座」	林康夫	平成 20（2008）年	A007794
138	寓舎「’12-2」	林康夫	平成 24（2012）年	A007795
139	記録と記憶　B	林康夫	平成 27（2015）年	A007796
140	くきの笛	坪井明日香	昭和 57（1982）年	A007425
141	西域の道	坪井明日香	昭和 58（1983）年	A007426
142	京都図鑑　人物風姿	坪井明日香	昭和 62（1987）年頃	A007427
143	古代裂シリーズ　残片	坪井明日香	平成 4（1992）年	A007428
144	京町並紋　上り坂	坪井明日香	平成 16（2004）年頃	A007430
145	水中の環	坪井明日香	平成 22（2010）年	A007431
146	茶碗	坪井明日香	平成 27（2015）年頃	A007433
147	茶碗	坪井明日香	平成 27（2015）年頃	A007434
148	陶筥	坪井明日香	平成 27（2015）年頃	A007435
149	黒織部三段重	鈴木五郎	平成 12（2000）年頃	A007380
150	アロハオリベ椅子	鈴木五郎	平成 13（2001）年	A007196
151	ロスオリベ土瓶	鈴木五郎	平成 15（2003）年	A007197
152	延 07-1	伊村俊見	平成 19（2007）年	A007184
153	G-082	井上雅之	平成 21（2009）年	A007183
154	染付鉢「酔芙蓉」	小形こず恵	令和 3（2021）年	A007405
155	Bernoulli Diamonds	井戸真伸	令和 4（2022）年	A007777

【習】：㊥シュウ　㊧ジュウ　①ならう。―㋐繰り返し練習する。㋑まなぶ。まねる。㋒なれる。熟達する。②なれ親しむ者。③ならい。ならわし。④つむ。かさねる。つみかさねる。⑤→習習。⑥姓。

原作品に習って写された作品には、忠実に再現されたもののほか、単なる模倣ではなく、オリジナルの要素を取り入れながらも新しい作品として独自の表現がみられるものもある。未開の技術に迫った技術的背景や、当時の流行を示す歴史的・文化的背景を含めて、名品に習った「習蔵品」を紹介する。

［出品作品および解説］

NO	名称	産地・作家	時代	登録番号
156	染付字文火入	瀬戸窯	享和 3 年（1803）	A007732
	「祥瑞に習う」 祥瑞とは、中国の景徳鎮の民窯において明代末期頃に作られた青花磁器の日本における呼び名です。吉祥文様である幾何学模様をいくつも組み合わせた絵付が特徴です。祥瑞は日本人に大変好まれ、日本から発注されたものがほとんどであるとされます。そして、日本の磁器産地においてもさかんに写されました。江戸時代後期の瀬戸窯でも、非常に多くの祥瑞写しがみられます。本作の側面：「主人」「不相」「識偶」「坐為」「林泉」中国盛唐の詩人：賀知章（659-744）の詩の一部と考えられます。			
157	染付花唐草文菱形皿	瀬戸窯	文化年間（1804-1818）	A007733
	「有田窯に習う」 こちらの小さな皿は、一見すると、肥前・有田窯（現在の佐賀県）で作られたもののように見えます。糸切り細工という轆轤を用いずに成型した変形の小皿の形、見込中央には 18 世紀中頃以降の有田窯製品によく見られる五弁花の文様、口縁に施された口錆なども、有田窯製品の特徴を良く捉えています。ところが、裏面を見ると「文化尾製」銘があり、文化年間（一八〇四～一八一八）の瀬戸窯で作られたことが分かります。有田窯に劣らぬ品質を誇ることをアピールしているようです。			

<table>
<tr><td rowspan="2">158</td><td>陶胎漆器木具写し水盤</td><td>大喜豊助（四～六代）</td><td>江戸時代後期~明治時代（19 世紀後半-20 世紀前半）</td><td>A007215</td></tr>
<tr><td colspan="4">「漆器に習う」
漆の盤のように見えますが、よく見ると陶器製です。陶器の表面に漆を施す「陶胎漆器」の一種で、まるで漆器のように見せている「木具写」と呼ばれる大変珍しい技法です。木具写は、名古屋前津（現・名古屋市中区大須）で 18 世紀後半に始まった豊楽焼で創始されました。器の中を覗いたり、蓋を開けてみて初めて陶磁器製だとわかる驚きを人々に提供し好まれたと考えられます。豊楽焼の木具写は、明治時代以降も国内外の博覧会においても目に留まるよう斬新で大型のものが作られました。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">159</td><td>染付絵替六角皿</td><td>加藤周兵衛（初代～二代）</td><td>明治時代中期~大正時代（19 世紀中期~20 世紀前期）</td><td>A007758</td></tr>
<tr><td colspan="4">「古染付に習う」
古染付もまた、中国の景徳鎮の民窯において明代末期頃に作られた青花磁器の日本における呼び名です。民窯ならではの素朴な形や虫喰いと呼ばれる釉の小さなカケやハゲ、奔放な絵付の表現が日本人に好まれ、多く発注されました。古染付も、日本の磁器産地においてもさかんに写されました。本作を焼いたのは、高い技術力を持っていた瀬戸の白雲堂ですが、あえて古染付の魅力である素朴な形と奔放な絵付を再現しています。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">160</td><td>染付四君子文四脚付三段重箱</td><td>加藤紋右衛門（六代）</td><td>明治時代中期（19 世紀中期~20 世紀初頭）</td><td>A007756</td></tr>
<tr><td colspan="4">「逸品に習う」
こちらの重箱は、亀井半二作「染付四君子文二段重」を写しています。絵師の亀井半二は、山本梅逸に師事し、文政年間に瀬戸へ赴き、川本治兵衛や川本半助らの窯において絵付けを行いました。「染付四君子文二段重」は、明治期には半二の逸品として知られていたのかもしれません。本作を作った加藤紋右衛門（六代）はオリジナルをよく研究し忠実に写していますが、段数を三段に増やしています。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">161</td><td>青磁耳付花瓶</td><td>京都市陶磁器試験場</td><td>大正 4 年（1915）</td><td>A007220</td></tr>
<tr><td colspan="4">「「万声」に習う」
本品は、国宝の〈青磁鳳凰耳花生　銘「万声」〉（和泉市久保惣記念美術館所蔵）を模したとされています。正確には、胴の大きさや耳の形が異なり、忠実な再現ではないようです。従来、青磁の色味は、釉薬の調整に重点を置いていましたが、日本初の専門研究機関・京都市陶磁器試験場（明治 29 年設立）では、素地土に酸化クロムを混ぜ込み、釉薬には珪酸鉄を入れ、素地と釉薬の両面で研究を重ねました。それにより「砧青磁」の色合いに近づく成果を上げ、大正天皇の大典記念に京都市より献上しました。本品はその予備品です。</td></tr>
</table>

【祝】：㊐シュウ　㊔シュク　①はふり。男のみこ。神主。神を祭る者。②いわう。―㋐いのる。幸いを祈る。㋑ことほぐ。めでたいことを喜ぶ。③いわい。いのり。④長寿の祝いの酒を奉る。⑤たつ。たちきる。⑥おる。つづりつける。⑦国の名。⑧姓。

めでたい出来事を祝福することや、特定の事柄や日を記念することに関連した作品は、特別なものとして捉えることができる。また、日常生活（ケの日）とは異なる非日常（ハレの日）に用いる作品でもあり、文化的・儀式的な側面もみられる。喜び祝福するという行為・目的だけでなく、伝統文化への理解を深める「祝蔵品」として紹介する。

［出品作品および解説］

NO	名称	産地・作家	時代	登録番号
162	磁胎蒔絵龍文染付宝尽文三段重箱	瀬戸窯	江戸時代後期（19 世紀中期）	A007744
	「開けてびっくり！驚きのうつわ」 こちらの展示ケースの中にあるのは、すべて「磁胎蒔絵」あるいは「木具写」と呼ばれる特殊な装飾が施されたうつわです。先程の【習】のパートにも 1 点、陶胎のものを出陳していますが、磁器でも木具写はつくられました。棗や重箱、菓子器、蓋付碗など、一見すると漆の什器にしか見えないもので作られているのは、使用する際に開けてはじめて「実はやきものでした！」と分かる驚きを提供するためです。瀬戸で焼かれた磁器を、おそらく名古屋へ運び、そこで技術を持った蒔絵師が蒔絵を施したものと考えられますが、詳しい制作の流れはわかっていません。			
163	磁胎蒔絵宝尽文染付鶴文蓋付碗	川本半助（四～六代）	江戸時代後期（19 世紀中期）	A007746
164	磁胎蒔絵宝相華文染付宝尽文棗	川本半助（四～六代）	江戸時代後期（19 世紀中期）	A007748
165	磁胎蒔絵竹に鶏文染付草花文蓋付菓子器	川本半助（四～六代）	江戸時代後期（19 世紀中期）	A007745
166	磁胎蒔絵龍文棗	川本半助（四～六代）	江戸時代後期（19 世紀中期）	A007749
167	磁胎蒔絵秋草文染付鳳凰文棗	川本半助（四～六代）	江戸時代後期（19 世紀中期）	A007750
168	磁胎蒔絵根引松に鶴文染付桃花文蓋物	川本半助（四～六代）	江戸時代後期（19 世紀中期）	A007751
169	磁胎蒔絵捻文染付水禽文蓋付碗	川本半助（四～六代）	江戸時代後期（19 世紀中期）	A007747

<table>
<tr><td rowspan="2">170</td><td>磁胎七宝草花文赤絵金彩染付瓔珞文鉢</td><td>川本半助（伝・六代）</td><td>明治時代初期（19 世紀中期）</td><td>A007752</td></tr>
<tr><td colspan="4">「明治の一時期にだけ」
磁器の器の上に、銀線を置き、ガラスの釉薬を挿して焼成した「磁胎七宝」の鉢です。磁胎七宝は非常に手間のかかる技法のため、明治時代初頭のわずかな期間だけ、輸出向けに作られたとされています。本作は、染付の磁胎が瀬戸で生産され、赤絵金彩と七宝は名古屋で施されたものだと推測されます。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">171</td><td>色絵四君子文煎茶器揃</td><td>犬山焼</td><td>大正 12 年(1923)頃</td><td>A007177</td></tr>
<tr><td colspan="4">「煎茶で祝杯をあげよう」
犬山焼の煎茶器揃は、共箱の蓋裏に「鳴海杜神社々務所竣成記念」の墨書があり、本器も上絵付けで四君子（梅・竹・蘭・菊）が画かれ、金彩も施された祝いの煎茶器です。煎茶とは急須で淹れるお茶ですが、本格的に祝うなら湯を沸かすところから。涼炉は本来、屋外で用いられる携帯用の焜炉でしたが、日本の煎茶道では茶室内で大切に用いられてきました。陽羨とは、中国江蘇省宜興県付近の旧名で、「陽羨の茗」は茶の名品としても知られます。名茶で祝杯をあげよう。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">172</td><td>小篁画急須</td><td>清風与平（三代）
田能村小篁
田能村直入</td><td>明治 39（1906）年</td><td>A007581</td></tr>
<tr><td colspan="4">「文人と陶工の交流」
白磁胎の器には濃い鉄顔料で如意の絵と讃が筆書きされています。讃は「不老如意　九十三叟 直入道人写 小篁直筆写」とあり、不老長寿を祝っています。清風与平（三代）は、京都で活躍した陶工で、文人画家の田能村直入に入門し、陶磁分野で初めての帝室技芸員に任命されました。直入の孫・田能村小篁は文人画・山水画を得意としています。</td></tr>
<tr><td>173</td><td>琅玕磁急須</td><td>清風与平（四代）</td><td>大正～昭和（20 世紀）</td><td>A007582</td></tr>
<tr><td>174</td><td>白泥二重風門炉</td><td>京都</td><td>江戸時代後期（19 世紀）</td><td>A007546</td></tr>
<tr><td>175</td><td>「摹陽羨」急須</td><td>青木木米</td><td>江戸時代後期（19 世紀）</td><td>A007543</td></tr>
<tr><td>176</td><td>青花芙蓉手盤</td><td>中国・景徳鎮窯</td><td>明時代（16～17 世紀）</td><td>A007525</td></tr>
<tr><td rowspan="2">177</td><td>アニバーサリープレート</td><td>遠藤陶器株式会社</td><td>1980 年代</td><td>A007451
-000001～6</td></tr>
<tr><td colspan="4">「記念日には祝いのお皿を」
アニバーサリープレートは、アメリカで主に結婚記念日や誕生日などに贈られる祝いの品です。日本ではあまりなじみのないものですが、名古屋で外国向けの陶磁器を生産していた遠藤陶器株式会社の 1980 年代のヒット商品でした。手書きと転写の両方の技術を使い、お祝いの品らしく華やかな絵付けが施されています。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">178</td><td>干支ウィスキーボトル 2012 辰</td><td>加藤工芸株式会社（サントリー）</td><td>平成 24（2012）年</td><td>A007194</td></tr>
<tr><td colspan="4">「新年を祝う干支ウイスキーボトル」
愛知の陶磁器商社・加藤工芸で企画され、瀬戸の製陶所で制作された干支のウイスキーボトルです。新年の干支のボトル付きの迎春用ウイスキーとして販売されていました。この二つのボトルのデザインは加藤工芸の社内デザイナーをつとめた藤森兼明氏（1935－　）です。藤森は日展会員として活躍した洋画家としても知られています。瀬戸の陶製ウイスキーボトルは高い鋳込み成形の技術と分業体制、そして社員の芸術活動を奨励したこの地域ならではの製品であるといえるでしょう。</td></tr>
<tr><td>179</td><td>干支ウィスキーボトル 2013 巳</td><td>加藤工芸株式会社（サントリー）</td><td>平成 25（2013）年</td><td>A007195</td></tr>
</table>

【修】：㊥シュウ　㊀シュ　①おさめる。おさまる。―㋐ととのえる。ただす。㋑まなぶ。ならう。㋒なおす。手入れをする。㋓書物を編む。㋔そなえる。②かざる。③ながい。たかい。④よい。すぐれる。⑤月陽の一。⑥他の楽器と合奏せず、鐘だけを打つこと。⑦酒を入れる器の一種。⑧→修修。⑨姓。

作品の修復方法は千差万別、元の状態に復元され修復の跡が一見わからないもの、全く別の意匠が加えられて機能を回復したもの、またその意匠に新たな美意識が創出されたものなどがある。あえて修理・修復が加えられて後世に残った作品には無傷の作品にはない魅力がある。修復された部分にスポットを当てた「修蔵品」として紹介する。

［出品作品および解説］

NO	名称	産地・作家	時代	登録番号
180	灰釉甕	今井窯	江戸時代中期(18 世紀後半)	A007175
	「子はカスガイ…の鎹です」 現在の愛知県犬山市で、江戸時代中期に操業していた今井窯の甕です。美濃系の技術を導入し、灰釉や鉄釉の製品を焼きました。この甕は、胴部を 8 カ所、計 27 個の鎹で修復しているのが特徴です。鎹は、中国由来の修復技術で、割れてしまった器の表面に小さな穴を開けてそこに金属の鎹を打ち込みます。			
181	壺	珠洲窯	鎌倉～室町時代（14 世紀）	A007464
	「知られざる中世の修復技術」 本器は、粘土紐輪積みタタキ成形をした後、器面を磨き上げた精製品の壺です。本器で注目される腰部の穴について、青白磁の破片で穴を塞ぎ、布を当てて漆で固めて補修されています。穴は意図的に穿たれたものと見られ、注口を付けるなどして用いられた後、中世の当時所有していた中国の青白磁の破片をあてがい、布と漆を用いて修復し通常の壺として用いられたと推測されます。			

【什】: ㊥シュウ　㊧ジュウ　①くみ。軍隊の十人一組の単位。②十人。また、十家。③とお。④十倍。⑤十等分。⑥いろいろな。もろもろの。雑多な。⑦「詩経」の雅・頌の十編ずつの区分。⑧詩編の異称。⑨→什麽。

什器とはもともと仏教用語の「什物」に由来し、寺で使用されている器具を指し、そこから日常生活で用いる器物のことをいうようになった。様式美より機能美を備えた器物や、何気ない普段使いの器物も、時代が変われば歴史的・文化的側面が再認識され、後世に伝えるべき作品へと昇華する。日常の伝統文化を示す「什蔵品」を紹介する。

［出品作品および解説］

NO	名称	産地・作家	時代	登録番号
182	片口鉢・入子片口・壺・信玄弁当・蓋付碗・徳利	瀬戸窯	江戸時代後期～近代（19 世紀頃）	A007763～7771
	「日々使う、愛されるデザイン」 鉄・呉須・赤楽を用いて描いている縦縞文は、江戸時代後期から近代にかけて生産された瀬戸の本業焼を代表する、現在でも広く親しまれている意匠です。この種の文様は、麦藁手・木賊手とも呼ばれます。柳宗悦は『手仕事の日本』の中で「日常の雑器でおそらく今一番よい品を作るのは品野であります。」と瀬戸の本業焼で作られる什器の美に注目しています。			

【衆】: ㊥シュウ　㊧シュ　①おおい。多数。一㋐人が多い。㋑数が多い。②多くの人。多くの民。庶民。③多くの家来。百官。④多くのこと。⑤（仏）僧。僧を数えるのに用いる。

大量生産によって作られる「数物」は、生産コストを抑えることができ、流通にも適している。また、一つが破損したり紛失したりしても、大きな支障がないという利点がある。一方で、現代の数物が均一であるのに対し、古い時代の数物には違いがあり、完全に同一のものは存在しない。数が多いこと自体に意味があり、また、一点一点に異なる魅力がある「衆蔵品」を紹介する。

［出品作品および解説］

<table>
<tr><th>NO</th><th>名称</th><th>産地・作家</th><th>時代</th><th>登録番号</th></tr>
<tr><td rowspan="2">183</td><td>五彩煎茶図盤</td><td>中国・景徳鎮窯</td><td>01「大明嘉靖年製」銘：明時代後期（17 世紀） / 02「雅」字銘：明時代末期～清時代（17～18 世紀）</td><td>A007565-000001,2</td></tr>
<tr><td colspan="4">「悠々煎茶のひととき」
白磁胎に赤・緑・黄と鉄釉を用いて文人が煎茶を嗜んでいる様子を描いている輪花の盤です。長い口顎髭をたくわえた文人は、右手に小さな茗碗を持ち座り込み、背後には茶壺と書籍と香炉が、傍らには茶銚と盆器、台座付きの三足器に花がいけられています。絵付けが精緻で、底裏に「大明嘉靖年製」銘を持つ盤が 1 枚あり、組皿の手本であったと考えられます。その他の 10 枚には底裏に「雅」銘がみられます。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">184</td><td>青花動物文角皿</td><td>中国・景徳鎮窯</td><td>明時代末期～清時代初期（17 世紀）</td><td>A007568-000001～3</td></tr>
<tr><td colspan="4">「あつめてわかる、1 点 1 点の良さ」
内面に鹿と猫が、背景に草花文と鳥、奇岩、雲文が青花で描かれている角皿です。21 点のうち丁寧に描かれているものとやや粗く描かれたものの 2 つのパターンに分かれています。また、鹿と猫のほかに蝙蝠が描かれた作品が 4 点、蝶と太陽（または月）が描かれたものが 1 点みられます。底裏の銘の有無など製品としての違いもありますが、1 点 1 点見どころがあることに気付かされます。</td></tr>
<tr><td>185</td><td>色絵貝尽文四方皿</td><td>有田窯</td><td>江戸時代中期（18 世紀前半）</td><td>A007567</td></tr>
<tr><td>186</td><td>色絵獅子文四方皿</td><td>有田窯</td><td>江戸時代（18 世紀）</td><td>A007566</td></tr>
</table>

【拾】：㊥シュウ　㊧ジュウ　①ひろう。ひろいとる。②おさめる。あつめる。③ゆごて。弓を射るとき、左ひじに　保護のために着ける革製の道具。④とお。数の名。

焼成不良や破損により廃棄されたものや、役目を終えて処分されたものには、一度はその存在意義を失ったかに見えるものの、新たな発見や再認識を経て価値を持つものがある。痕跡や発見状況から時代を特定したり、破損部を手がかりに技法を解明したりすることで、当時の文化や習俗を伝える意義が生まれた「拾蔵品」として紹介する。

［出品作品および解説］

<table>
<tr><th>NO</th><th>名称</th><th>産地・作家</th><th>時代</th><th>登録番号</th></tr>
<tr><td>187</td><td>円筒埴輪片</td><td>名古屋市城山 1 号墳出土</td><td>古墳時代中期～後期（5 世紀後半～6 世紀前葉）</td><td>A007192-000003</td></tr>
<tr><td rowspan="2">188</td><td>東山 201・212 号窯跡出土品</td><td>猿投窯</td><td>飛鳥～平安時代（7 世紀後半～12 世紀前葉）</td><td>A007192-000001</td></tr>
<tr><td colspan="4">「名古屋市東部の猿投窯の痕跡」
猿投窯は当館 2 階の愛陶コレクション「世界はやきものでできている」でも大きく紹介しているが、愛知のやきもの産業の原点となった最重要な窯跡です。名古屋市東部、現在の千種区を中心に広がっていた猿投窯の東山地区は、猿投窯の開窯の地であり、猿投窯の生産のピークの一つである 12 世紀の窯跡が集中する地域でもあります。現在の千種区内の地名にも、「末盛」「瓶杁」といった「末＝陶」「瓶＝甕」といったやきもの生産を彷彿とさせるものがあります。残念ながら戦後開発が早くに進んだ地域であり、調査を待たずに多くの窯跡が失われましたが、ここでは開発で破壊される遺跡を前に地道な陶片の採集、保存を続けられた地元寄贈者の収集品を紹介します。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">189</td><td>東山 G-52・72 号窯跡出土品</td><td>猿投窯</td><td>平安時代末期（11 世紀末～12 世紀前葉）</td><td>A007585～7611</td></tr>
<tr><td colspan="4">「今は無き復興期の猿投窯の一つ」
猿投窯は愛知のやきもの産業の原点ですが、その 900 年の歴史には浮き沈みがあります。8・9 世紀に猿投窯の最大の隆盛期があり、続く 10・11 世紀は衰退期を迎えますが、12 世紀に復興期と称せるほどの爆発的な生産が行われました。復興期の拠点が名古屋市東部、現在の千種区を中心に広がっていた猿投窯東山地区で、12 世紀頃だけで百箇所近い窯跡があります。ここで紹介する窯跡の出土品は、戦後の開墾時に発見されたものですが、開発の早く進んだ東山地区の他の窯の例にもれず、残念ながら 1980 年頃には滅失しています。本展示品がこの窯の生産内容を伝えるわずかな資料ですが、復興期の猿投窯の主力生産品であった椀等の日用品の他、他にほとんど類例が知られていない特注品と思しき小形の壺等があります。</td></tr>
<tr><td rowspan="2">190</td><td>萱刈窯跡出土品</td><td>瀬戸窯</td><td>鎌倉時代末期（14 世紀前葉）</td><td>A007612～7731</td></tr>
<tr><td colspan="4">「中世の瀬戸窯の最盛期を示す名窯」
瀬戸市内では 10 世紀に猿投窯の系譜を引いて陶器生産が開始されましたが、12 世紀末に当時衰退していた施釉陶器生産を大々的に復活させ、以後鎌倉・室町時代に国内唯一の高級施釉陶器生産地としての地位を確立しました。中でも 13 世紀末から 14 世紀中頃までの時期が、最も中世の瀬戸窯の製品が華々しい時期で、多種多様な器種や器面に施されたスタンプ文様（印花）や線刻文様（画花）の豊富さが特筆されます。ここで出土品を紹介する萱刈窯跡と呼ばれる瀬戸市内北部の窯跡は、中世の瀬戸窯の最盛期の様相を示す窯跡として古くから注目されてきました。様々な文様で器面が飾られた瓶子・水注・合子・花瓶・香炉等から、当該期の瀬戸窯の生産の一端をご覧ください。</td></tr>
</table>